

瓦に次いで多く出土したのが、生活に欠かせない土器類です。土師器や須恵器が大半ですが、中には奈良三彩や緑釉陶器、中国で作られた白磁などの遠方で作られたうつわも出土しています。また、古代の文書行政や信仰を窺わせる遺物など、国分寺の性格を象徴する遺物も出土しました。

### 銅製の印



「常」と彫られた銅製の印。  
印面は一辺3.1cm四方、持ち手は花びらの形を模しています。  
文字の「口」が欠けたため、廃棄されたのでしょうか？



拓本

### でいとう 泥塔



粘土で塔を模して作られた泥塔。  
平安時代末、貴族が寺院に納めて供養することが盛んでした。  
下部が欠け、残存高は4.4cm、三重以上の塔を模しているようです。



### さんさい 三彩



上段左は白地に緑色と褐色の3色の釉薬を施した唐三彩の破片です。  
このほか、唐三彩を模して作られた奈良三彩の可能性が高い破片（上段中央・右）と奈良二彩（下段）があります。

### 平安時代の土器

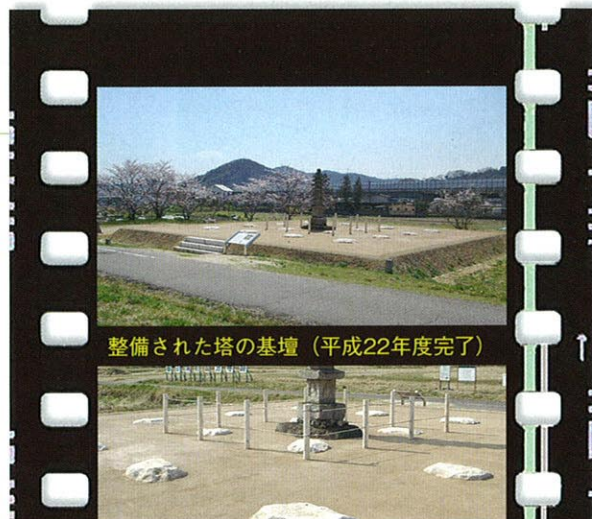


北側の回廊から出土した平安時代の土器類。  
最前列：（以下左から）土師器の皿、杯2点  
2列目：土師器の杯2点  
3列目：白磁の碗2点、須恵器の椀（左奥の白磁：高さ8.0cm）

## よみがえる国分寺

備前国分寺跡では、平成21年度から保存整備事業が始まっています。

整備に先立つ平成15年度からの発掘調査の成果を基に、備前国分寺の歴史を学習・体感する場として整備していく計画です。



整備された塔の基壇（平成22年度完了）